2017 年 11 月 9 日放送

「第 116 回日本皮膚科学会総会 ①

会頭講演　Neo-dermatology の時代を生き抜く」

東北大学大学院　皮膚科
教授　相場　節也

はじめに

この度、東北大学皮膚科学教室が主管を務め、第 116 回日本皮膚科学会総会を 6 月 2 日（金）～6 月 4 日（日）の三日間、仙台国際センターを会場に開催させていただきました。学会開催の数日前までは、不順な天候が予想されていましたが、会が近づくに従い天気予報があらためられ、3 日間恵まれた天候の中開催できました。当初、地方開催ということで参加者の減少が懸念されましたが、私たちの予想を上まわる 5,000 人近い学会員、関連企業の皆様にご参加頂くことができました。

第116回日本皮膚科学会総会 地下鉄東西線 国際センター駅出口

本学術大会のテーマ Neo-Dermatology を生き抜く

Neo-Dermatology という言葉は、私が調べた限りでは、Kliegman 先生が 2002 年の Journal of Investigative Dermatology の論文中で、ヨーロッパ中心の記載皮膚科学に対し、20 世紀中頃に始まった米国中心の研究皮膚科学、evidence-based 皮膚科学を称して用いたのが始まりです。Kliegman 先生が意図した Neo-Dermatology は、その後の分子生物学、遺伝子改変マウス技術の進歩に後

第116回日本皮膚科学会総会（仙台国際センターエントランス）

押しされ病態解析皮膚科学へと発展しました。しかし残念ながらこれらの手法では、ヒト皮膚疾患の病態を類推し仮説を打ち立てることはできても、それを検証することはできませんでした。ところが、ここ十数年前から登場した新たな遺伝子解析手法や生物学的製剤により、これまでの仮説がたちどころに検証され、我々が以前には経験したことが無い、有効な薬剤が次から次と市場に登場するようになりました。Kliegman 先生が意図した Neo-Dermatology とは別次元の Neo-Dermatology (新生皮膚科学)の到来です。

実際、最近の皮膚科を取り巻く環境は激変しています。乾癬、悪性黒色腫に始まりアトピー性皮膚炎、蕁麻疹の治療にまで拡大する生物学的製剤、分子標的薬は、今から 10 年前には想像もつきませんでした。今後これらの薬剤の普及により、これまではクリニックで治療していた患者さんが市中病院、大学病院の皮膚科、さらには内科や整形外科で治療されるようになるかもしれません。また、これだけ高額な医療費を現在の保険制度が維持し続けられるとは到底思えません。さらに今後、新専門医制度の導入、総合診療医の出現と続き、その上、telemedicine の普及は目の前に迫っていますし、遠からず AI が皮膚科診断の一端を担う日が来ると思われます。

そこで本学会では、本来の皮膚科学会総会の目的に加えて、1) 学会員に向けて激変する皮膚科およびそれを取り巻く環境の変化にいかに立ち向かうかを考えて頂く機会を提供する、2) 東北地方の震災からの復興を後押しする、3) 日本全国から集まる会員の皆様に東北地方の魅力を再認識して頂く、の３つを大きな目標といたしました。

特別企画

そこで第 116 回総会では、Neo-Dermatology の時代に皮膚科診療を取り巻く環境がどのように変わるのか、またその新しい環境の中で皮膚科医はどのようにしたら生き残れるのかを 4 つのシンポジウムを通して考えてみました。

一つは、医療制度の側面から、これからの皮膚科診療を考える「Neo-Dermatology 生き残りをかけた皮膚科の未来」、二つ目は、近未来の皮膚科診療、病診連携のあり方を考える「Neo-Dermatology－near future & beyond：皮膚科診療はこう変わる」、三つ目は、これからの医学研究、皮膚科学研究の未来を考える「皮膚科研究の目指すべき道とは」、最後は、皮膚科診療にどのように AI が取り込まれるかを予測する「より深く AI（愛）ある医療へ」この中で、とりわけ照井正教授と根本治先生にオーガナイザーをお願いした「皮膚科医の生き残る道はあるのか？」においては、石川ベンジャミン光一先生（国立がん研究センター臨床経済研究室長）、迫井正深先生（厚生労働省老健局老人保健課課長）のお二人に 1) 人口動態（二次医療圏別）と疾病構造の変化、2) 国の制度改革（地域医療構想、地域包括ケアシステム、かかりつけ医と総合診療医）に関してご講演頂きました。また総合診療医を代表して、東北大学病院 石井正教授に総合診療医、かかりつけ医の具体像についてご講演頂き、皮膚科の近未来像が鮮明に浮かびあがったように思います。

また、今回の総会のもう一つの大きな使命が、東北地方の震災からの復興、再生の後押し

です。そこで、「2011 年 3 月 11 日、そしてそれからの道のり」という特別企画の中で、震災の時に活躍された 3 人の演者の方たちに当時を振り返り、今後いつ、どこで起こるとも限らない災害に対する心得をお話し頂きました。具体的には、震災直後石巻赤十字病院で災害医療の陣頭指揮にたたれた東北大学病院総合地域医療教育支援部 石井正教授、福島原発直後にその対応にあたられた東北大学大学院医学系研究科放射線生物学分野教授 細井義夫教授、最も甚大な被害を受けた南三陸町町長であり、みずから庁舎で津波に遭われ九死に一生を得た佐藤仁様のご講演はどれも心を打つお話でした。

最後に、仙台は魯迅が日本で学生時代を過ごしたゆかりの地です。東京大学教授 藤井省三先生にオーガナイザーをお願いし、江蘇省特別招聘教授・南京師範大学 林敏潔先生を交えて魯迅の足跡とその業績をたどるシンポジウムを行いました。全く皮膚科と関連の無いシンポジウムにも関わらず、オーガナイザーが驚くほど多数の参加者を数えました。また藤井先生は、その後、第 116 回皮膚科学会総会印象記を『日本経済新聞』中国語ネット"日経中文網"連載コラムに寄稿して下さいました（https://cn.nikkei.com/columnviewpoint/column/26032-2017-07-17-04-54-00.html?start=1）

招請講演

土肥記念講演は、Ludwig-Maximilians-Universität München の Thomas Ruzicka 教授にお願いしました。Ruzicka 先生は、多くの日本人研究者と親交があり、また最近ではアトピー性皮膚炎に対する IL-31 抗体の臨床治験を日本人研究者と共同で行われました。講演では、基底細胞癌の多彩な臨床像、発症にかかわる分子メカニズム、治療法など幅広く講演されました。

特別講演

National Institutes of Health Bethesda の Katz 先生は、これまでの多くの日本人研究者との交流を振り返られた後、NIH の director として目の当たりにされてきた過去 40 年間の医学、皮膚科学の目覚ましい進歩について述べられました。同じく、特別講演では、坂口志文教授(大阪大学免疫学フロンティア研究センター)に皮膚科医に向けて制御性 T 細胞を中心とした免疫制御の仕組みについてお話を頂きました。最近では、免疫制御は皮膚疾患の病態、治療を考える上で皮膚科医に取って必須の知識となっています。野田哲生先生（がん研究所所長）には、癌研究の最新の知見を分かり易くご講演頂きました。

皆見省吾賞受賞講演

今年の皆見省吾賞は、慶応義塾大学 横内麻里子先生に授与されました。Epidermal cell turnover across tight junctions based on Kelvin's tetrakaidecahedron cell shape という受賞論文で、顆粒層の細胞が tight junction のバリアー機能を維持しつつ角層にいかにして変化していくのかを、Kelvin14 面体モデルを用いて物の見事に証明した素晴らしいお仕事

でした。

教育講演

今回の総会では、教育講演はおしなべてどの会場も多数の参加者が集まり、多くの会場で参加者が 200 人を超していました。特に参加者が多かったシンポジウムをピックアップすると、ダーモスコープ、アトピー性皮膚炎、かゆみの講演で、どこの会場もほぼ満席の状態でした。今年の新しい傾向として、それらに加えて、新薬の出た蕁麻疹、今でも様々な新規アレルゲンが同定されている食物アレルギー、多くの皮膚科医が治療に難渋している痒疹、常に知識のブラッシュアップの必要な感染症などの講演に多くの参加者が集まりました。また例年通り、皮膚病理道場、ダーモスコピー道場、皮膚外科道場には多くの先生方が参加され、皆さん熱心に受講されていました。

スポンサードセミナー

スポンサードセミナーにも非常に多くの先生方が参加してくださいました。次から次と登場する生物学的製剤の流れを反映して、乾癬関連のセミナーが目立ちましたが、意外に製品の宣伝主体ではなく、皮膚疾患とその周辺の臨床や基礎的知識の啓発を主体としたセミナーも多数見られ、教育講演で踏み込めなかった内容を補填してくれました。腸内細菌、皮膚細菌叢、皮膚バリア機能、irAE マネジメント、ヘルペス、疣贅治療などに多くの参加者が集まりました。また化粧品会社のセミナーも例年になく多く、内容も皮膚科医に必要な洗浄剤の基礎知識、化粧品の安全性確保、皮膚の可視化、シワ研究の基礎など興味深いものが目立ちました。

一般演題

すべて 3 分の口頭発表で行った一般演題には 420 の演題が集まりました。その中で、15 演題に優秀一般演題賞を授与しました。また AGORA for Young Asian Dermatologists では、アジア各国の若手研究者が一般演題、Keynote lecture 併せて 20 に近い演題を発表し、その内 1 題に優秀演題賞を授与しました。

おわりに

最後に、本学会では 5,000 人近い会員の皆様にご参加頂くことができました。学会の運営、コングレスバッグ、皆様の宿泊、飲食、お土産等で仙台ひいては東北地方の復興に多少なりとも貢献できたのではないかと考えています。また東北出身の小山実稚恵さんのピアノ演奏、福島県立平商業高等学校のフラダンス、懇親会での東北 6 県キッチン、緑に囲まれた学会場など東北地方の魅力も多少なりとも味わって頂けたのではないかと思います。個人的には、多くの住民が生まれ故郷を失った福島県から来られた平商業高等学校の皆様が、素晴らしい笑顔で踊ってくれた童謡「故郷」に涙がこぼれました。